Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第14回

Western Electric KS-Type Amplifier

Western Electric 社といえばアメリカの電機機器開発・製造企業として 1881年から1995年まで、AT&Tの製造部門として存在した国家的企業で、日本のオーディオマニアの間では真空管300B、555レシーバーなどの製品で親しまれている。同社は1950年代から60年代にかけての業務拡張において、生産ラインのOEMが進み、アメリカ国内のそれぞれの地域で信頼性のあるDukane、Mcintosh、Elgin、Rayparなど数社によって、生産ラインをWestern Electric 社に管理された（アンプの回路設計とトランスはWestern Electric 社から供給）KSナンバーのアンプが数機種生産されている。

本文／**田中伊佐資**
製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）
撮影／君嶋寛慶

KS-16617

正面がスイッチパネルのラックマウント型の電話のモニター用に開発されたパワーアンプ。出力管に6V 6が2本プッシュプル動作で8W出力となっていて、業務用らしく600Ωラインのインプットトランスを標準装備している。また、内部の配線によって4、8、16、32、250、600で接続可能となっている。音質はウエスタンらしい中域のしっかりした音の中に6V6真空管の持つ少しスパイシーな味が良く絡んだ明瞭感のある美しい音が聴ける。高能率スピーカーなら38cm同軸ユニットにも十分対応できる。市場価格30 ～ 35万円／ペア

ウエスタンは〝新しめ〟に魅力ありオートグラフが生き生きと鳴る

「いつ登場するのか。いやしないのか」と気にはなっていた大御所ウエスタン・エレクトリックにようやく出番が回ってきた。このタイミングはまったくJe-Teeの岡田さんらしい。「なにを差し置いてもまずはウエスタンでしょう」となるのがヴィンテージ・ショップ店主のありがちな姿だと思うのだが、この神格的存在をいまごろひょっこりと持ち出してきたのである。しかも後光が差すような伝説の戦前モデルではなく、1960年前後のウエスタンにしては新しめのパワーアンプである。

「生粋のウエスタン・ファンは『こんな若いのは使わない』とよく言います。だけどすごくハイファイで豊潤な音がする。この頃のどんなスピーカーともマッチングはいい。逆にいえば古いウエスタンのアンプが特殊なんですね」

この連載で大きなテーマとなっている「ヴィンテージの穴場探し」の面目躍如といったところだ。というか、僕のようなウエスタンの右も左も分からない人間にしてみれば、リッチなアメリカン・サウンドの黄金期という別の意味で、この年代の製品には惹かれる。

アンプは出力が異なる3機種が用意されていた。すべてモノブロック仕様だ。型番の数字は非常に近いので完全に兄弟である。スピーカーはタンノイのオートグラフ。稀少なモニター・シルヴァーを装着している。

「初期のタンノイは意外と小出力のウエスタン系のアンプで生き生き鳴らすことができますね。昔のタンノイは低音がモコモコしちゃう場合があるけど、これはいける。クラシックだけでなく意外とジャズも歯切れがいい。ではそろそろ聴いてみますか。定番からいきます」

『ヘレン・メリル・ウィズ・クリフォード・ブラウン』を出力の小さい順で聴いていった。ヘレンの声は、アンプ「小」がベタつかず清楚な色気があり、「中」が少し厚くなって落ち着きが出て、「大」で陰影感が増強された。もちろんこれは連続して聴いた結果であって相似形ともいえるぐらいの同系トーンで3機種がまとめられている。岡田さんは「設計とトランスがいいんだろうね」と指摘した。確かにハツラツとしていて曇りのない音だ。

試聴はどんどん続く。ジェニファー・ウォーンズの声は爽やかな「小」が僕の好みで、ロッシーニの弦楽ソナタはさすがに深みがある「大」が圧勝。結局のところ「大」の三分の一ぐらいの価格で手に入る「中」が音とフトコロの満足度が高いように思った。

ところでこれらのパワーアンプが店にペアで揃う頻度といえば、「小」が年に1回、「中」が年に2回、「大」が5年に1回だという。どうやら数年に一度接近するなんとか彗星となんとか流星群をいっぺんに見たような好機だったようだ。

KS-16608

通信用に開発されたパワーアンプで、着脱式のアンプケージが付いていて、ライトと電源スイッチのブロックがパネル側かシャーシ横に付け替えられるようになっている。6L6真空管2本のプッシュプル動作で12W動作と音質重視の設計なっている。型番からすると、KS-16617より少し前に開発されたアンプと思われる。KSシリーズのアンプの中では比較的多く生産されており、当時のアメリカでは最も多く生産され入手がしやすかった6L6真空管を選んだのもうなずける。音質は6L6の透明感ある音質を中域の豊かなWesternトーンでまとめあげた音質で、小出力ながら力強いパフォーマンスを演じてくれる。市場価格45 ～ 55万円／ペア

カバーを取り付けた状態

フロント部

カバーを取り付けた状態

フロント部

KS-16610

KSシリーズ最大出力のアンプで、劇場や大ホールで使われたと思われる。通常6550真空管を4本パラレルプッシュ動作で使うと150W以上の出力が引き出す事が可能だが、KSシリーズの中でこのアンプだけチョークトランスと電圧安定管のOD-3が搭載され、音質重視の75W動作となっている。このアンプも着脱式のアンプケージが付いていて、ライトと電源スイッチのブロックの場所が付け替えられるようになっている。型番からしてKS-16608とほぼ同じ時期に開発されたものだが、生産台数はかなり少なく、滅多に市場に出てこない。音質はKS-16608の表現力豊かな音質を損なわずにパワーアップさせた、現代のスピーカーにも十分対応できる強い低域音に駆動力のあるサウンドを聴かせてくれる。市場価格155 ～ 170万円／ペア

取材協力：アトリエJe-tee　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com